スクミリンゴガイ情報第１号（水稲）

令 和 ７ 年 ４ 月 ７ 日
愛 知 県 農 業 総 合 試 験 場
環境基盤研究部病害虫防除室

近年発生が続いているほ場では注意しましょう

１　スクミリンゴガイについて

本種は、ほ場や水路で越冬し、水温 15℃以上で活動を開始します。特に柔らかい植物を好み、田植え後約３週間までの稚苗を食害します。水中で摂食活動を行い、水面上の茎葉も引き込んで摂食するため、食害に遭った部分は欠株となります。多発生の場合、ほとんどの株が食害されることもあります。

２　今後の発生予測

前年６月下旬及び７月下旬に県内 47 地点（１地点あたり２ほ場）で実施した巡回調査において、スクミリンゴガイの発生が確認された地点の割合（発生地点率）は過去 10 年と比較して最も高い状況でした（前年 43%、平年 33%、前々年 30%）（図）。

冬期の気温が高いほど、スクミリンゴガイの越冬量は多くなる傾向です。令和６年 12 月から令和７年２月までの日最低気温の平均値は 2.0℃（平年 2.5℃、前年 3.6℃）と過去 10 年と比較して平年並です。しかし、冬期の気温が低くても、発生地点率は一定の割合以上で推移していることから、近年スクミリンゴガイの発生が続いているほ場では注意が必要です（表１）。

また、４月３日名古屋地方気象台発表の１か月予報によると、向こう１か月の気温は高いと予想されています。**スクミリンゴガイの活動開始が例年より早まることが考えられるため、早い作型でも本種の発生及び被害に注意しましょう。**

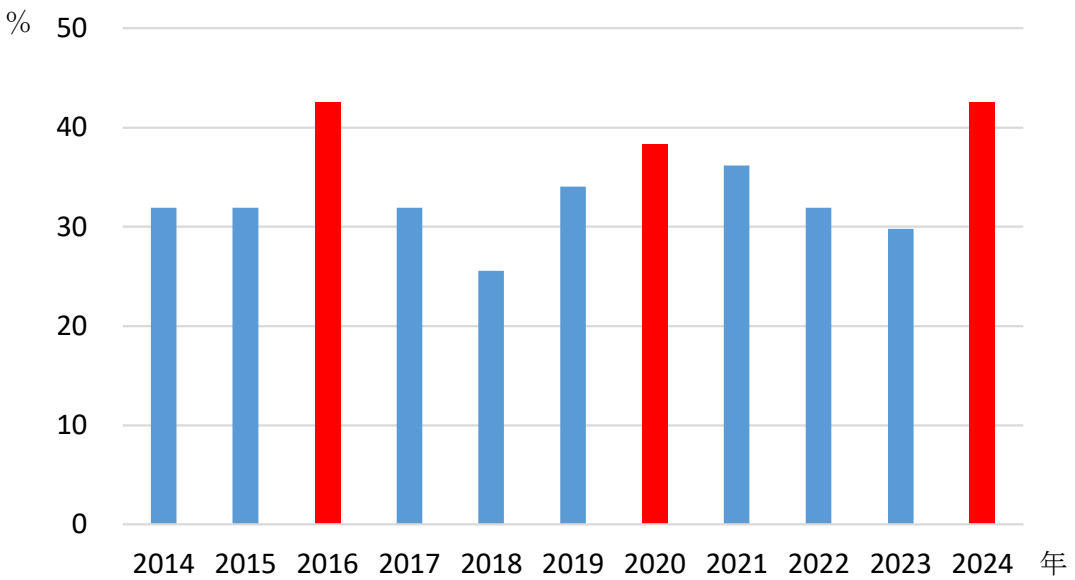

図　巡回調査 47 地点（94 ほ場）におけるスクミリンゴガイの発生地点率（６～７月）

表１　冬期の気温と翌年度のスクミリンゴガイの発生地点率

年度	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
平均気温※１（12～２月、℃）	5.3	7.2	6.0	4.7	6.8	7.8	6.6	5.3	6.1	7.5	5.7
最低気温※２（12～２月、℃）	1.8	3.3	2.1	0.9	3.0	4.1	2.8	1.5	2.2	3.6	2.0
翌年度の発生地点率（%）	32	43	32	26	34	38	36	32	30	43	?

※１　12月～２月の各月平均気温から平均値を算出（アメダス地点：名古屋）

※２　日最低気温の月平均の12月～２月の各月の数値から平均値を算出（名古屋）

３　防除対策

スクミリンゴガイの発生が確認されているほ場では、表２を参考に薬剤散布を行いましょう。本種は田植え後すぐに摂食を開始するため、移植同時または移植直後に薬剤散布を行いましょう。薬剤は湛水状態で散布し、散布後７日間は落水やかけ流しをしないようにしてください。

他の対策として、スクミリンゴガイは水中でないと摂食できないため、移植後３週間頃まで浅水管理（水深４cm 以下）を行うことや、取水口にネット等を設置し水路から本田への本種の流入を防ぐことも重要です。

４　その他

スクミリンゴガイの防除対策については、農林水産省がマニュアル等（アドレス：https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/sukumi.html）を公開していますので、参考にしてください。

表２　水稲のスクミリンゴガイに対する主な防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
スクミノン	メタアルデヒド	収穫60日前まで	散布又は無人航空機による散布	２回以内※
ジャンボたにしくん	メタアルデヒド	収穫60日前まで	散布	２回以内※
スクミンベイト3	燐酸第二鉄	発生時	散布、 無人航空機による散布	－

※メタアルデヒドを含む農薬の総使用回数

使用回数には、同一有効成分を含む剤の使用回数を含む。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。